つつじ通信
73号
2020.10.7 発行

新しい炎症性腸疾患センター（新任のあいさつ）

炎症性腸疾患センター長　　深田　雅之

こんにちは。令和２年１月から東京山手メディカルセンターの炎症性腸疾患センター長となりました深田雅之と申します。この度は新任の挨拶を兼ねて、私自身と炎症性腸疾患センターについて紹介させていただきたいと思います。

～炎症性腸疾患を知るために歩んだ道～

私は 1969 年に埼玉県川越市で生まれました。1994 年に東京慈恵会医科大学を卒業し、消化器内科医を志してからずっと炎症性腸疾患という病気に取り組んでまいりました。あれから四半世紀、我が人生の半分以上を医師としてこの病気の理解と治療にかけて感じるのは、一つのことに情熱を傾けて、それを仕事として生きられることへの感謝です。

炎症性腸疾患は、主に腸に慢性の炎症を起こすことで、腹痛、下痢、発熱、血便などの症状もたらす病気で、クローン病や潰瘍性大腸炎、ベーチェット病などを含みます。いずれも原因が不明で、現在でも難病に指定されていますが、私が炎症性腸疾患を診はじめた頃は、日本では患者さんも今ほど多くなく、わからないことばかりでした。そこで私は、当時炎症性腸疾患の患者数が多かったアメリカで、炎症性腸疾患について学ぼうと思いました。

2003 年に渡米して 2017 年までの約 15 年間、私は、ニューヨークのマウントサイナイ病院（1923 年にクローン病が発見された病院です）、マイアミ大学、シーダスサイナイ病院、カリフォルニア大学（UCLA）で、炎症性腸疾患の診療において有名な先生たちから様々に学んでまいりました。この間に、炎症性腸疾患の皆さん、その家族や友人の方々、恩師の先生方、同僚医師達、看護師、その他の医療従事者、研究者、そして私を日々支えてくれる家族との関わりの中で、国や人種を超えて多くの経験をさせていただきました。この度、縁あって東京山手メディカルセンターで炎症性腸疾患の診療をさせてもらうこととなり、私が経験してきたことが、より多くの人の役に立てられたらと思っています。

～当院の炎症性腸疾患センターで目指したいこと～

私の在米中に、日本では炎症性腸疾患の患者さんが当時の 10 倍以上に増え、また、世界的に新しい薬の開発が進んで、治療の選択肢が増えました。こういった時代の変化から将来を見据えて、当院における炎症性腸疾患診療の歴史と、私が多くの施設で経験してよかったと思えることを総合し、今後当センターで推進したい 3 つのことがあります。それは、目標達成型の治療、チーム医療、そして医療連携です。

炎症性腸疾患は慢性の病気で、病状が良い時と悪い時があるため、長い人生の間には生活上の様々な困難を経験するかもしれません。腸に同程度の炎症があっても、患者さんによって、生活に影響なく長期に過ごせる方、なかなか症状がコントロールできず入退院をくりかえしてしまう方、頻回に手術を受けなければならない方などがいます。厚生省のガイドラインに基づいた上で、我々が目指したいのは、現在の腸の炎症を抑えるということだけでなく、日々の生活の中で起こる様々な出来事に対応して、より豊かに過ごせるための病気のコントロールです。そのためには、病気にまつわる複合的な理解と、検査結果や数値だけでは判断できない部分へのチャレンジが必要です。

当院には、それぞれ異なる分野で長く炎症性腸疾患に関わって来た経験の豊かなスタッフがおりますので、一人ひとりの患者さんにチームで関わることで、治療目標に合わせた多角的アプローチが可能になると期待しています。また、当センターには全国各地から患者さんがいらしています。遠方の患者さんにおいては、地域の先生方と連携して治療することも可能ですので、担当の先生を通じてご相談下さい。炎症性腸疾患では、救急対応が必要となることが多々ありますが、そういった病気の特性を理解して、緊急時の入院など柔軟に対応してゆきたいと考えています。